支部見聞録
From 北見

北見〜北の大地に結ぶ開拓の夢物語

広大な沃野（よくや）を擁して豊かな産物に恵まれている北見市。その発展の陰には、興味深いドラマが秘められている。土佐からの移民団による開拓と、かつて世界に冠たる特産物だった「ハッカ」による発展と――。意外に知られていない物語を、北見に訪ねよう。

北見は市として北海道一の広さを誇る。山あいに見えている平地が北見盆地、市街地周辺

龍馬の縁に連なる北見開拓史

現在の北見市は東はオホーツクの海辺から西は北海道の屋根・大雪山の石北峠まで東西の道路延長110kmという広大なエリアを占め、北海道では最大、全国でも4番目に広い市。オホーツクエリアでもっとも人口が多く、地域の中核を担う存在だ。広大な北見盆地に車を走らせれば、どこまでも続く畑の中を道はまっすぐに伸び、高台には緑の牧草地が果てしなく広がる。

今は豊かな風景に恵まれた北見だが、開拓が始まったのは遅く、北海道でも最後に近い。1897（明治30）年5月、当時野付牛（ノツケウシ、アイヌ語で「野の果て」の意味）と呼ばれた地に最初に入植したのは、1カ月の航海に耐えてはるばる土佐から来た民間の開拓団「北光社」約110家族。同志と共に北光社を組織し、社長を務めたのは坂本直寛。実はこの人は坂本龍馬の長姉・千鶴の息子、つまり龍馬の甥にあたる人物だった。

そもそも坂本龍馬自身、北海道の開発には強い関心をもっていて、浪士による移住計画を実行しようとしたこともあったと伝えられる。その死から30年の年月を経て、遺志を継ぎ北海道開拓に夢を馳せた坂本直寛は、自由民権運動に挺身したキリスト教信者で、彼の率いた北光社の目的は、キリスト教を精神的支柱とした自営農民による平等なコミュニティを新天地・北海道に建設しようという壮大なものであった。

坂本直寛
直寛は龍馬の長姉・千鶴と高松順蔵の子。龍馬の長兄である権平の養子となり、坂本家の5代目を継いだ。また、直寛の年の離れた実兄で海援隊などで龍馬と行動をともにした高松太郎は、龍馬の死後に龍馬の養嗣子となって坂本直と名乗っている。直寛が自分の家族と亡くなった直の妻子を北海道に呼び寄せたことで、龍馬の子孫を含む坂本家は北海道へ移り、龍馬の夢はようやく一族によって果たされることになった。

北光社本社跡には坂本直寛や澤本楠彌の碑が建つ

崇高な理想の一方で、開拓の現実はそれは厳しいものだった。開拓民の住まいは林の中の草葺き小屋。北光社入植の1カ月後、開拓と国防の二つの役割を担う屯田兵の入植も始まったが、「政府の制度だった屯田兵に比べ、民営の北光社は何もかも自力で当たらねばならず、生活は困窮を極めたようです」と、祖父が北光社移民団の一員だった北海道北見地区高知県人会の岡村叶夫会長は語る。そのような中で坂本直寛は入植の4カ月後に野付牛を離れ、北海道中西部浦臼の聖園農場に移っている。北光社による開拓のスタートを見届け、土佐の自由民権の同士で急逝した聖園農場指導者の後を手助けするためともいわれるが、諸説あり、理由は定かではない。

後事を託されたのは、実務に明るい副社長の澤本楠彌。彼は優秀な農業指導者でもあった前田駒次とともに開拓地の経営に全力を傾けた。しかし、ようやく切り開いた耕地も、1898（明治31）年秋、水害で大打撃を受ける。冷害もひどく、開拓地を去る者が後を絶たなかった。

取材・撮影協力／北見市商工観光部、北見観光協会、オホーツク龍馬会、北海道北見地区 高知県人会、北見ハッカ記念館、ピアソン記念館（順不同）

屯田公園の前田駒次像

北見に尽くした宣教師夫妻の家

北見市街の高台に、スイスの山小屋を思わせる小さな西洋館が建つ。この家は、伝道や廃娼運動に尽くしたピアソン宣教師夫妻が1914（大正3）年から14年間住んだ家で、窓からは北光社の開拓地を望む。夫妻は北光社の人々とも親交があり、この家は現在ピアソン記念館として公開されている。

北光社の経営に苦闘しながら、澤本は野付牛農業会の会長を、前田は初代の野付牛町長を務め、ともに鉄道開設に尽力。特に前田は苦労の末に水田開発に成功し、寒冷地・北見での稲作のパイオニアとなった。また北海道会議員も兼務して地域の発展に尽くし、生涯清貧を貫いたという。開拓の主力の屯田兵と共に、町の発展は北光社の存在抜きには語れない。町を巡れば北光社本社跡地に坂本直寛の碑とともに澤本楠彌の記念碑が、屯田公園には前田駒次の像が建つ。また、高知との絆は今も息づき、1986（昭和61）年には姉妹友好都市となった。観光協会やJAも姉妹関係を結び、農業高校のインターンシップなど数々の交流事業が行われている。

世界一を誇ったハッカ生産の産地

ところで、開拓の鍬が入った野付牛に、ほどなくして持ち込まれた作物があった。それが「ハッカ」である。1899（明治32）年に北光社でも試験栽培した記録があるが、一気に栽培が広がったのは1902（明治35）年頃から。屯田兵の一人がハッカ栽培と製油を手がけ、莫大な利益を得たことがきっかけだったという。ハッカの香り成分であるメントールは、解熱や鎮痛、消炎などの効果があり、医薬品に広く使われた。特に純粋なメントールの結晶（薄荷脳）は日本特有の和種ハッカからしかできず、西欧に輸出されていた。ハッカはすぐ金を手にできる換金作物で芋や豆に比べて値も高かったので、栽培の広がりとともに北光社や屯田兵の生活もようやく落ち着きを見せ始めた。

明治末には町が形作られ、ハッカ景気に湧いた。1911（明治44）年に鉄道が開通すると人が押し寄せ、大正のはじめには人口が2万5千人に。また関東大震災で首都圏のハッカ倉庫が燃えると値段が高騰、多くのハッカ成金が生まれたという。とはいえ、ハッカの買い付けは本州の商人に牛耳られ、不当に安値を強いられる事態も続いていた。

サイロのある風景

そこで地元の要望を受け、1934（昭和9）年にホクレン北見薄荷工場が完成。地元の手で取引と製造が行えるようになり、「HOKUREN」ブランドのハッカはアメリカで高い評価を得た。最盛期は1939（昭和14）年。なんと世界の需要の70％を北見産のハッカがまかなっていたというから驚きだ。まさに世界一のハッカの生産地である。

工場事務所を利用したハッカ記念館

隣接の蒸留館には昔の蒸留機も展示

中央の瓶の白い結晶が「薄荷脳」

仁頃のハッカ御殿。ハッカ商人、五十嵐弥一の家で、周囲は公園として整備されている

ハッカ生産は戦後も盛んだったが、昭和40年代以降合成ハッカや外国産のハッカが台頭。安定したビート（砂糖大根）の契約栽培などに転じる農家が増え、ハッカは北見の表舞台から退場していく。現在では、わずか数戸が栽培するのみ。しかし、国産品を見直す気運の中で人気は根強い。また、ホクレン北見薄荷工場の旧事務所（現ハッカ記念館）や仁頃地区にあるハッカ御殿が、近代化産業遺産に認定されており、往年の栄華を今に伝える。

苦難に充ちた開拓の歴史と、ハッカ産業で大きく発展した北見の大地。かつて北光社の人々はわずかな土地に縛りつけられて明日の展望のない故郷を捨て、北の大地に夢を馳せた。屯田兵として来た人たちも事情は似たようなものだったろう。現在、北見市の耕地面積は約2万ヘクタール。兼業農家を含めて1戸あたりの農地の平均は16ヘクタールにもなる。日本一の玉ねぎ産地として知られ、ビートやじゃがいも、水稲栽培、酪農も盛んだ。大きなトラクターやハーベスターがよく似合う、広く豊かな大地。それは明日を拓こうと原野に挑んだ人たちの、夢の所産なのだ。

別冊 FROMはウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
eふぁみり
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/

出典　FUJITSUファミリ会　会報Family338号（2010年12月20日発行）